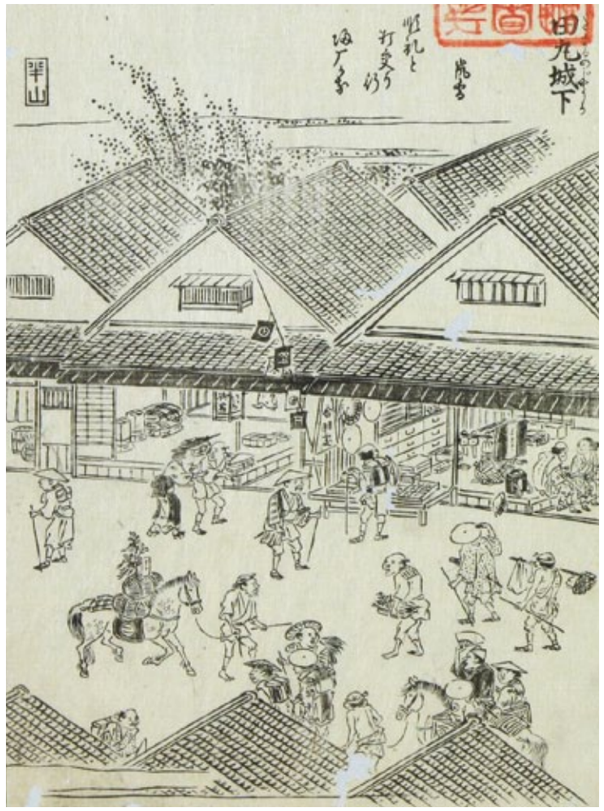
巻頭特集

熊野古道 伊勢路出立の地、田丸

かつて数多の旅人を迎え入れた

田園地帯広がるのどかな平野に
田丸城跡の石垣がまちのシンボルのよう。
城下町として発展した玉城町は、
いくつかの街道が交差した宿場町でもある。
熊野三山や西国霊場につながる
熊野古道伊勢路のスタート地点となっている。

風情漂う田丸駅。大正元（1912）年頃に木造平屋の駅舎が完成



西国三十三所の名所を紹介した江戸時代の図会。伊勢路出発の地として栄えた田丸の往時が偲ばれる

まちの中心部で交わる 大和、熊野、伊勢の分岐点

田丸城跡から歩いて三分ほどの場所に、「紀州街道　よしのくま乃みち」と記された背の高い道標が立つ。ここで三本の街道が交わっている。大和へつながる初瀬街道、伊勢神宮へと向かう伊勢本街道、そして聖地・熊野を目指す熊野街道（熊野古道）だ。交通の要衝であった田丸（玉城町）は、伊勢神宮や熊野三山、西国巡礼を目指す旅人たちの宿場町として栄えた。

熊野古道伊勢路は、かつて伊勢神宮の参拝を終えた旅人が、さらに熊野三山や西国巡礼を目指して熊野へ向かうために辿ったとされるルート。徳川頼宣の入府がきっかけで、田丸から新宮（和歌山）までが、より一層街道として整備された背景もある。

かつての旅は、一度出たならば一カ月から半年に及んだ。お伊勢参りの後、ほかの神社仏閣を巡ったり、各地の名所旧跡を訪れたりしながら帰郷するのが一般的だったそうだ。そんな旅人が、巡礼の白装束姿に着替え、出発の準備を整えたのが田丸の宿場町。『西国三十三所名所図会』の中の「田丸城下」には、菅笠や笈（おい）摺（ずり）などを売る店が描かれている。伊勢本街道から熊野街道が分岐する、いわば熊野古道旅立ちの地から、熊野三山や西国三十三所の一番霊場である那智山の青岸渡寺を目指した。

街道の風情漂う道筋に 講札の掛かる旧旅籠

熊野街道は、玉城の風情ある町並みから、多気町内を歩き、女鬼峠を越えて、栃原（大台町）へと抜ける。道標の場所で「玉城町語り部会」の疋田武さんは「朝早くに伊勢神宮を出て、丸一日歩いて栃原の宿を目指したか、半日の行程であれば、ここ田丸に泊まったのでしょうね」と話す。熊野とは反対に伸びる道を指差し、「この初瀬街道は、神宮を定めた倭姫命も歩いたという古くからある道です。そんな歴史もあって、多くの人が田丸を通ったのでしょう」と当時のにぎわいを偲ぶ。道中記の資料を手に、疋田さんと昔日の面影をたどってみた。

菅笠に杖をつき、わらじで歩く二体のモニュメントが田丸駅前にある。地場産の良質な粘土を使った陶製で、歩き旅の姿を彷彿とさせている。平成十六年に、熊野古道伊勢路が世界遺産登録されたのをきっかけに寄贈されたものだ。

銀杏の古木がそびえる三縁寺を左に眺め、旅籠が軒を並べた街道筋へ戻る。きざみ囲いや格子窓の家屋が、当時の風情を残して数軒佇んでいる。しばらく歩くと、道中記にも登場する旧旅籠の「扇屋」だ。瓦屋根にも扇を象り、玄関の土間には「一新講」の札が掛けられている。「大阪からの一行です。昔は講を組んで旅に出ました。街道沿いには雨合羽など旅の必需品を扱う店も多くありました」と疋田さん。

玉城語り部会
疋田武さん
田丸城や伊勢神宮摂社・末社など、まちの歴史や文化に精通している。周辺地域の語り部たちとも交流を重ねる

昔日の記憶を辿り 祈りの道を熊野へ進む

東の方角へとまっすぐ延びる伊勢街道は、宮川で渡し船に乗って、伊勢山田のまちへ向かうが、扇屋でUターンして西を目指し、突き当りの二股を右へと進む。すぐ先に見える銀行の手前を左折すると、正面には田丸城跡の石垣が現れる。熊野を示す道標で再び左折すると、武家屋敷跡の通りに出る。ここには江戸時代の城主・久野家の家臣が住んだ屋敷が街道沿いに並んでいたという。久野家代々の菩提寺・大得寺も近くにある。

道標に従って右へ曲がると、そこは昭和三十年頃まで栄えたかつての歓楽街。今もその面影を残す建物は、現在、参宮ブランド擬革紙の会の活動の場として使用されている。

外城田川の橋を渡って交差点を過ぎ、幸神の常夜燈で道が二股に分かれている。右の田園地帯を進むと、一体の石像が佇んでいる。おだやかな顔つきの接待地蔵だ。街道に沿う野篠区東端に昔から接待場といわれた場所があり、お茶の接待をしていたそうだ。その地に接待地蔵があったと夢枕にお告げがあったことから、昭和十年に掘ってみると台石のみが出てきたので、新しい地蔵尊を建立し、開帳供養が行われたという。

柿畑を過ぎて、道が二手に分かれているところに、「順礼道引観世音」の看板が立つ。熊野街道は細い道へと進み、丘の上に多数の石像が安置されたお堂が目に留まる。三十三体の観音を安置した「石佛庵」だ。一つひとつの石仏は、西国三十三所霊場の観音を順に表したもので、中央に第一番札所が置かれている。熊野へ向かう旅人が道中の安全を祈願したり、西国霊場の代わりに祈りを捧げたりしたと伝えられる。三百年ほど前のものと推測され、灯籠には享保五（一七二〇）年と刻まれる。三十三体の台石には、「江戸 鉄砲町、北伊勢、尾州」など寄進した人々の地名のほか、名前や戒名も彫られている。

現在、お堂の向かいは廃寺となり本尊は別の場所に預けられるが、入口には順礼道引観世音の立派な石柱が立つ。お堂の西に秋葉堂、東に金比羅社があり、信仰の深さを物語っている。疋田さんは「大台町にある柳原観音と並んで、この場所も多くの旅人が立ち寄ったと思われます。ぽつぽつと残された歴史を面として考えていきたい。すべての道はつながっています」と、さまざまな歴史上の事柄をつないで検証する。

街道筋を歩いて歴史を知った途端に、暮らすまちの新しい一面が見えてきた。

上）熊野街道沿い、33の観音石仏が並ぶ石佛庵。かつての旅人も、今と変わらぬ風景を眺めていたであろう　右下）江戸時代、自由には諸国を往来できなかったが、旅の目的が神社仏閣への参詣であれば、庶民でも比較的許可が得やすかった。その頃の道中記。宇治、あさま、二見の文字と並んで「たまる」とある。「扇屋」を常宿とした「一新講」のもの　左下）伊勢本街道と熊野街道が合流する場所に立つ道標

上）道路脇に佇む接待地蔵。かつて、ここで旅人を接待したという。コハナが手向けられ、地元の人のお参りも多いのだろう　下）扇屋のある街道には、所々きざみ囲いや格子の家が残されていて、風情が漂う

残された歴史を面として考えていきたい
すべての道はつながっています

玉城町のシンボル・田丸城跡。延元元（1336）年に北畠親房・顕信父子が南朝義軍の拠点として砦を築いたのが最初といわれる。まれに天守台から富士山を望めるそうだ

玉城語り部会
玉城町教育委員会事務局
☎0596-58-8212

文・写真／中村元美　デザイン／chica